

[生徒指導]

大規模校におけるソーシャル・スキル教育

- 全校規模で取り組むための工夫 -

秦野 真一*

1 研究の目的

近年、児童を取り巻く環境の変化により、仲間とのかかわりが少なくなり、人間関係が希薄になってきているといわれている。そのため、コミュニケーションの機会が少なくなり、ソーシャル・スキルが不足している児童が多くなっている。このような傾向に対して、予防・開発的な視点に立ったソーシャル・スキル教育が学校現場で盛んに行われるようになってきた。

当校は全校児童数800人以上の大規模校である。児童の実態を振り返ってみても、思ったことをすぐに口に出したり、特定の仲間とのみかかわっていたりする様子が見られた。このような人間関係をうまく築けない児童に対し、具体的な手立てを講じていく必要があった。そこで、当校でも、人間関係を築くための知識や技能をスキルとして学習するソーシャル・スキル教育に着目し取り組んできてはいた。

しかし、これまではソーシャル・スキル教育に関心のある職員が特定の学級やグループを対象に取り組むにとどまっていた。その結果、学習後には一時的に効果は見られたものの、時間が経過するとともに学習したスキルが発揮される場面は減っていく傾向にあった。これは、スキルを学習した児童が他の集団の中でスキルを発揮しようとしなかったり、スキルを発揮しても相手からの反応が乏しかったりしたためである。このような姿から、スキルの共有範囲を学級規模から学校全体に広げていくことの必要性を感じた。そこで、全校規模でソーシャル・スキル教育に取り組み、全校の児童が同時期に共通のソーシャル・スキルを学習していくことを考えた。全校規模でソーシャル・スキル教育に取り組み、共通ソーシャル・スキルを身に付けたり確かめたりすることで、校内にスキルを発揮しようとする雰囲気が高まる。ソーシャル・スキルが全校に広まっていくことによって、人間関係が良好になり、様々なトラブルを未然に防ぐことにつながると考えた。

また、当校は全校で32学級ある。全校規模でソーシャル・スキル教育を実施していくためには、32人の学級担任がソーシャル・スキル教育の目的を正しく理解し、適切に指導できることが大切である。しかし、大規模校のような新採用の職員から経験豊富な職員までいる集団において、全職員が足並みを揃え実践していくことは、容易ではない。大規模校でソーシャル・スキル教育を全校規模で実践していくためにはソーシャル・スキル教育への全職員の共通理解と一人一人のトレーナーとしての力量を高めていくことが必要である。

伊佐(2004)は全校100人程の小規模校で全校規模のソーシャル・スキル教育に取り組んだ。その中でソーシャル・スキル教育を学校の教育活動全体の中で行う有効性を検証し、実践モデルとして大きな成果を挙げた。しかし、大規模校において、同様の取組をそのまま実践していくことは難しい。そこで、ソーシャル・スキル教育を推進していくための組織づくりや生徒指導部と連携等、指導体制や指導方法を工夫していくことが必要である。本研究では、大規模校で全校規模のソーシャル・スキル教育を実践していくためのポイントや留意点を明らかにし、その有効性を検証していくことが目的である。

2 研究の方法

ソーシャル・スキル教育年間指導計画を作成し、全校規模で指導に当たる。児童の変容を自己評価アンケートやQ-U調査の結果、教師による日常の観察から検証するとともに、ソーシャル・スキル教育実践後の保護者からの反応を基に、大規模校における全校規模のソーシャル・スキル教育の有効性を明らかにしていく。

(1) 時期：2008年5月～2009年2月

(2) 対象：全校児童813名

* 上越市立春日小学校

3 実践の内容

(1) 教職員間の共通理解を図るための取組

各学年の取組に大きな差が生じ、職員間に取組への温度差が広がることは、児童のソーシャル・スキルの獲得にマイナスの影響を及ぼすと考えられる。そこで、全校規模でソーシャル・スキル教育を推進していくための校内体制（図1）を確立した。

① S S E (social skills education) 推進部の発足

全校規模でソーシャル・スキル教育を推進するために中心的役割を担っていくのが、S S E推進部である。S S E推進部の構成部員は4名で、ソーシャル・スキル教育に関心があり、これまでも独自にソーシャル・スキル教育の実践を積み重ねてきた職員である。

そのため、他の職員に比べソーシャル・スキル教育に関する知識や経験が豊富である。S S E推進部の役割は、年間指導計画を作成し、それに基づき実施計画の作成や教材の開発、提供等をする。各学年に実践を任せるのではなく、S S E推進部が中心になって学校全体の計画を作成していく。S S E推進部が積極的にリーダーシップを発揮することで、全校規模のソーシャル・スキル教育を計画的に実践できるようにした。

② 生徒指導部との連携

ソーシャル・スキル教育を推進する際に、生徒指導部と連携し指導体制を整えた。S S E推進部は生徒指導部と以下のように連携を図った。

(ア) 生活目標とソーシャル・スキル教育の一体化

生活目標とソーシャル・スキル教育を一体化し、学校内に生活目標とソーシャル・スキル教育の目標の二つが同時に設定されないようにした。身に付けさせたいスキルを焦点化することで、児童と職員が取り組むべき目標を明確にできるようにした。

(イ) いじめ防止学習プログラムとの関連

生徒指導部が作成する「いじめ防止学習プログラム」の自校プランの中には、中1ギャップ解消を目指した取組が組み込まれている。その取組の一つとしてソーシャル・スキル教育を盛り込んだ。職員が、ソーシャル・スキル教育は中学校につながるという意識をもって実践できるようにした。

(ウ) 生徒指導部会への参加

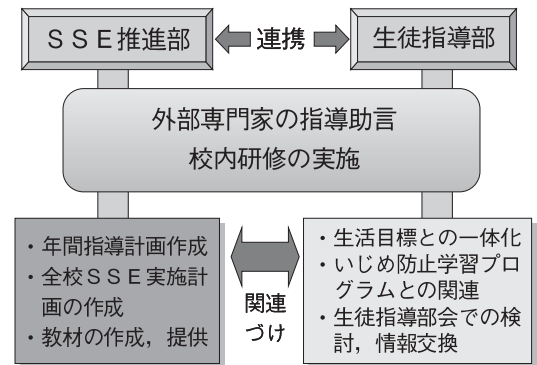
生徒指導部会に、S S E推進部員が定期的に参加した。ここでは、S S E推進部が作成した実施計画を生徒指導部へ提案し検討した。生徒指導部は生活指導主任を中心に各学年の主任で構成されているため、部会で理解、承認された内容は各学年主任から学年の職員に伝達されていく。実践後は再度生徒指導部会が開かれ、各学年の実施状況を情報交換し、全校の進捗状況について共通理解を図るようにした。

このように、生徒指導部が作成する「月の生活目標」や「いじめ防止学習プログラム」の自校プランとソーシャル・スキル教育との関連を図ることで、学校の教育活動全体にソーシャル・スキル教育が浸透していくようにした。さらに、生徒指導部会を通じ情報交換をすることで、各学年間の取組に差が生じないように調整するだけでなく、取組への工夫、改善を図りながら教師間の連携・協力を生み出せるようにした。

③ 職員の指導力を高めるための研修

各学級担任のトレーナーとしての力量を高めるために年2回の校内研修を実施した。1回目は5月にS S E推進部が中心となり、ソーシャル・スキル教育の必要性や目的、実際の授業の進め方を研修した。2回目は6月に上越教育大学特任准教授の伊佐貢一氏を講師として招き、師範授業や『学校で集団に対して行うソーシャル・スキル教育』と題した講義をしていただき、職員全員で研修を深めた。また、S S E推進部の職員は年間を通じて、伊佐氏から具体的な指導・助言を受けた。実施計画について指導・助言を受けるだけでなく、実際に職員の授業を参観してもらい、授業の進め方や内容について具体的な指導・助言を受けた。S S E推進部員は伊佐氏からの指導・助言を次のプログラムに向けた計画作りに生かすようにした。

このような外部の専門家からの指導・助言は全校規模のソーシャル・スキル教育を立ち上げる際にはとても重要であると考えられる。外部の専門家からソーシャル・スキル教育の考え方や指導の方法を学ぶことで、職員の共通理解が深まると考えた。



〔図1 ソーシャル・スキル教育を推進する際の校内体制〕

(2) スキルの選定と配列の工夫

SSE推進部が年度当初にソーシャル・スキル教育年間指導計画（図2）を作成した。初めに、取り上げるソーシャル・スキルの選定を行った。大規模校においては、多くのソーシャル・スキルを取り上げるよりも、スキルを絞り込み、一つ一つのスキルに丁寧に取り組んでいくことが必要である。伊佐（2004）は、『『あいさつ』『上手な話の聞き方』『温かいメッセージ』は、最も基本的なスキルであると同時に重要なスキルであることが過去の取組から明らかになったので、指導計画に取り入れることが大切である』と述べている。本校でも、取り上げるソーシャル・スキルを「あいさつ」「上手な話の聞き方」「温かいメッセージ」の3つに絞り込み、「SSEの3本柱」とした。この3つのスキルは、人間関係を築くための土台となる基本的なソーシャル・スキルである。相手の目を見てあいさつをする、相手の話を真剣に聞く、温かい表情や言葉で相手にかかわることで、よりよい人間関係が築かれていくと考える。

次に、この3つのスキルを年間の生活目標と関連をもたせたスキルの配列を考えた（表1）。まず、6月に「相手の話を上手に聞く」を実施した。話の聞き方のターゲットスキルは、他のスキルにも共通する内容が多く、すべてのスキルの基本となる。初めに上手な話の聞き方に丁寧に取り組むことで、その後のソーシャル・スキルの学習が一層効果的になると考えた。「温かいメッセージを伝えよう」は、7月と11月に分けて実施し、それぞれで取り上げるスキルを変えた。7月や11月は校内で行事的な活動が続くため、ソーシャル・スキルを学習する時期と学習したスキルの般化を促す場と期間を、行事との関連をもたせ、温かい雰囲気の中で行事を迎えることができるようにした。9月には「気持ちのよいあいさつ」を取り上げた。新学期の始まりに自分たちの挨拶の仕方を見直すことで、さわやかに新学期をスタートできるようにした。各月のソーシャル・スキルの学習は、全校が同時期に共通のソーシャル・スキルを学習するが、2月だけは、1年のまとめとして、これまで取り組んできた「SSEの3本柱」の中から、学年の実態に応じてスキルを選び、学年単位でそのスキルを学習した。

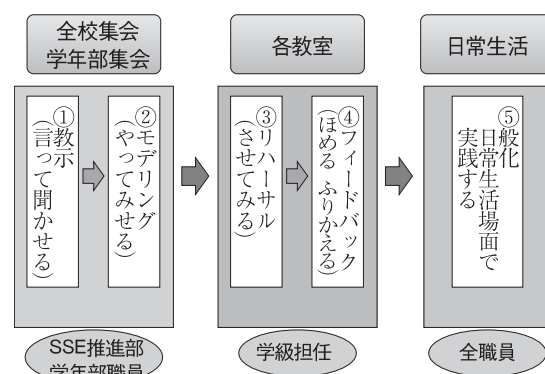
〔図2 ソーシャル・スキル教育年間指導計画〕

〔表1 年間のソーシャル・スキル教育の配列〕

時期	生活目標	主なねらい	具体的なスキル
6月	相手の話を上手に聞く。	・人の話を聞くことの大切さを理解し、自分が改善するところに気が付く。 ・上手な話の聞き方を身に付ける。	・今していることを止める。 ・相手を見る。 ・うなずく ・関係のあるコメントを返す。
7月	温かいメッセージを伝え合おう①	・自分が伝える言葉が相手に及ぼす影響を理解する。 ・温かい言葉掛けの伝え方を身に付ける。	・気づかう言葉 「だいじょうぶ」等 ・感謝する言葉 「ありがとう」等
9月	気持ちのよいあいさつをしよう	・挨拶は良好な人間関係を築く第一歩であることを理解する。 ・時と場に応じた挨拶の仕方を身に付ける。	・いろいろな人に ・相手の目を見て ・聞こえる声で ・笑顔で
11月	温かいメッセージを伝え合おう②	・自分が伝える言葉が相手に及ぼす影響を理解する。 ・温かい言葉掛けの伝え方を身に付ける。	・ほめる言葉 「じょうずだね」等 ・励ます言葉 「がんばってね」等
2月	1年を振り返ろう	※2月は、SSEの3本柱から学年の実態に応じて一つを選び取り組む。	

(3) 実施方法の工夫

年間指導計画に基づき、月の初めに「SSEタイム」と称して、全校集会または学年部集会でソーシャル・スキルの学習を実施した。1回のソーシャル・スキルの学習は45分を基本とし、実施方法を工夫した（図3）。教示とモデリングは全校が体育館に集まり、全校一斉に行う（写真1）。教示とモデリングはSSE部の職員と担当学年の職員が協同で行い、学習するスキルの必要性を教示したり、教師が良いモデリングと悪いモデリングを示し、その違いを考えさせたりした。話の聞き方やあいさつのスキルは、全校集会で共通の場面を取り上げモデリングした。話の聞き方やあいさつのスキルでは、朝の会で友達のスピーチを聞く、登校班で友達にあいさつを交わす等の日常的な



〔図3 ソーシャル・スキルを学習する際の45分の流れ〕

場面をモデリングし、1年生から6年生までの学年差があっても無理なく取り組めるようにした。温かいメッセージについては学年部単位で実施した。温かいメッセージは児童の発達段階や実態に合った場面設定をすることが必要である。児童の日常にそぐわない場面をモデリングしても、児童は違和感を覚え、学習したソーシャル・スキルを日常生活の中で実行していくことはない。そこで温かいメッセージについては、低中高の学年部に分かれ、実態に合ったモデリングを学年部集会の中で行うことにした。全校集会及び学年部集会で一斉に教示とモデリングをすることで、児童と職員の学校全体で取り組んでいこうとする意識を高めるだけでなく、職員の準備等にかかる負担感を軽減することができる。

全校集会や学年部集会で教示とモデリングを見た後で、児童は自分の教室に移動し、リハーサルを行う(写真2)。リハーサルでは学級担任が指導者となり、モデリングの場面をロールプレイで反復練習をする。学級によっては全校共通のシナリオの他に、自学級の実態に応じて場面設定を工夫したり、自分で台詞を考えたりした。リハーサルで留意すべきは、よくない行動よりも学習したスキルを実行している様子に注目することである。褒めたり励ましたりしながら、児童の意欲や自信を高めるようにしていく。学習の最後には「振り返りカード」(図4)を活用し、学習で分かったことや感じたことを書き込み、発表する。発表ではスキルを実行した自分自身も心地よさを感じている内容の感想も取り上げ、全体に広めていくようにする。



[写真1 教示とモデリング]



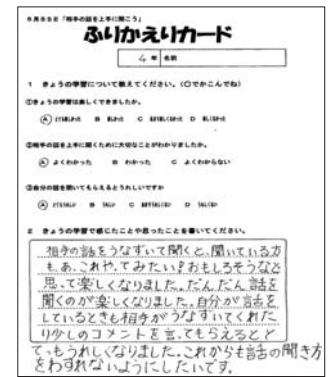
[写真2 教室でのリハーサル]

リハーサルの場面や「振り返りカード」についても、リハーサルの進め方について詳細に示した資料や「振り返りカード」のサンプルをSSE推進部から各学級担任へ提供する。これらの資料を参考に学年・学級化して取り組む場合もあるが、学年・学級間で取り組み方に大きな差が生じることなく進めることができる。ソーシャル・スキルの学習を授業で扱う経験が少ない職員にとっては、これらの資料は大きな助けとなる。

(4) スキルの般化に向けた全校共通の取組

ソーシャル・スキルの学習では、学習後に学習したスキルを日常のいろいろな場で実行していくことが最も重要である。学習したスキルが実行されていくことで、一人一人のソーシャル・スキルが向上し、スキルの般化につながる。スキルの般化を目指し、学習後に以下の取組を全校共通で実施した。

- ①学習したスキルを教室に掲示し、生活の中で意識させていく。(写真3)。
- ②学年・学級通信で学習の様子を紹介し、家庭への啓発活動を行い、理解と協力を求める。
- ③学習後の1週間、朝会や終会等を利用し「がんばりカード」(図5)や「あったかいメッセージ集め」を実施し、学習したスキルの実行について自己評価する。
- ④学習したスキルを実行している児童を教師が積極的に褒める。



[図4 振り返りカード]

スキルの教室掲示や家庭への啓発活動をすることで、児童の学習したソーシャル・スキルの実行を奨励したり、見守ったりする環境を整えた。「がんばりカード」では、一日の中で場面を決めてソーシャル・スキルの実行を促し、児童自身が振り返ることを1週間続け、全校で集中的に取り組んだ。また、教師は児童のスキルの実行に対して、プラスのフィードバックを心掛け、全職員で児童を認め、褒めていくことを共通理解して取り組んだ。スキルの般化に向けた取組でも、全学級で無理なく取り組める内容を計画し全学級で実施した。

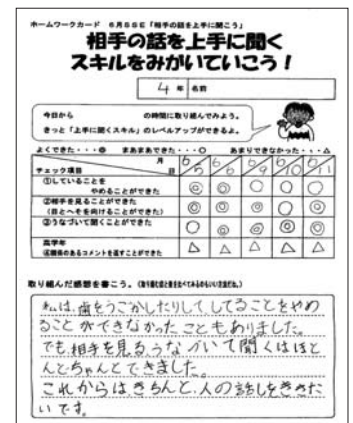


[写真3 学習したスキルの掲示]

4 結果

(1) 児童アンケートの結果や「がんばりカード」の振り返りから

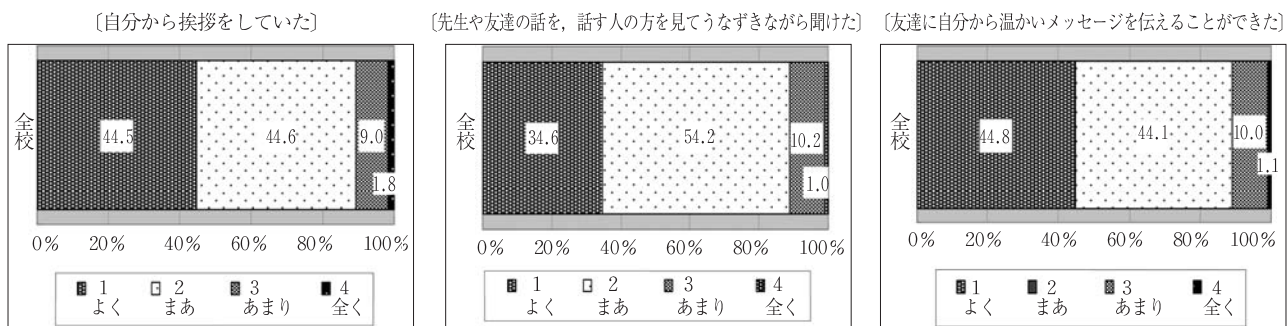
2学期末に、「SSEの3本柱」に関して児童アンケートを実施し、児童が学習した3つのソーシャル・スキルについて自己評価した。その結果、3つのソーシャル・スキルについて全校児童の9割近くが「よくできた」「まあまあできた」と回



[図5 がんばりカード]

答し、肯定的な評価をしている。伊佐（2004）は「全く獲得されていないスキルを新たに教えるより、基礎的なスキルをみんなで確認することによって9割の子どもにスキルを意識させることが大切である。」と述べている。児童アンケートの結果から、9割近い児童が「SSEの3本柱」を意識していきていることが分かった。

～「SSEの3本柱」に関する児童アンケートの結果～



また、ソーシャル・スキル学習の実施後の「がんばりカード」に以下のような感想が述べられていた。

- ・これからもうなずきながら、話をしている人を見たいです。あい手を見ることは大切なんだなと思いました。にこにこわらいながらきくと、あい手もいい気持ちになるし、じぶんもいい気持ちになりました。（2年生）
- ・相手の話をうなずいて聞くと、聞いている方も「あっ、これやってみよう。おもしろそうだ」などと思って楽しくなりました。だんだん話を聞くのが楽しくなりました。自分が話をしているときも、相手があずき聞いて聞いたり、コメントを言ってもらえたりすると、とてもうれしくなりました。（4年生）
- ・「ごめんね」や「だいじょうぶ」はとてもいい言葉だと思いました。温かい言葉は心が温かくなるけど、冷たい言葉は心をいためてしまうことがよく分かりました。自分が言われてうれしい言葉を、みんなにも言いたいです。とくに、気づかう言葉をたくさん使いたいです。（5年生）

児童からの感想にはソーシャル・スキル学習への肯定的なコメントが多く、学習したソーシャル・スキルを実行することで、相手も自分も気持ちがよくなったことを実感する感想が複数聞かれた。

(2) Q-U調査の全校の傾向から

全校児童にソーシャル・スキル学習の事前（1学期）・途中（2学期）・事後（3学期）においてQ-U調査を実施した。表2は、1学期から3学期までのQ-U調査における各群の全校児童の割合を示したものである。伊佐（2001）は、「児童のソーシャル・スキルの変容は、学級生活満足度に影響を与える」と述べている。1学期から3学期までの間に、学校生活に満足感を抱く児童の割合は63.0%から79.1%に増加し、不満足間を抱く児童の割合は12.4%から5.7%に減少した。また、Q-U調査の質問項目に対し、ネガティブな反応の児童の割合もすべての項目で減少した。特に減少の大きい項目は、「クラスの人にいやなことをいわれて、つらい思いをしたことはありますか」

（-15.8%）、「あなたはクラスの人から認められることがありますか」（-15.4%）、「あなたが失敗したときに、クラスの人があげましてくれませんか」（-12.4%）であった。

伊佐（2003）は、「『温かいメッセージ』のスキルが対人関係に大きな影響を与えている」と述べている。さらに、「温かいメッセージを送ること

以上に冷たいメッセージを送らないことが大切であることが強調されたため、侵害行為となる行動が抑制され、直接、非侵害行為得点を低減させている」とも述べている。本校のQ-U調査からも、同様のことが言えると思われる。全校児童を対象にソーシャル・スキル教育を実施したことで、児童のソーシャル・スキルが変容し、学級生活満足度に強く影響を及ぼしたといえる。

(3) 職員の意識の高まり

2学期末の職員の学校評価の中で、ソーシャル・スキル教育を実施した後の児童の様子について、「温かいメッセージが日常の場面の中で聞かれるようになり、人を非難するような冷たいメッセージが少なくなってきている。」「話を聞く時に、相手の顔を見て聞く様子が多く見られ、集中して話を聞ける子が増えた。」との記述が多く見られた。職員が日頃の児童の様子を観察し、行動の変容を感じ取ることができた。また、全校規模で取り組んだことについて、「全校SSEに取り組むことにより、全校が同じ方向（目標）に向かって一丸となっているように感じる。引

〔表2 Q-Uアンケートにおける各群の全校児童の割合〕

	1学期	2学期	3学期	1学期から3学期までの増減
学級生活満足群	63.0%	73.3%	79.1%	+16.1%
非承認群	11.7%	10.3%	6.8%	-4.9%
侵害行為認知群	12.8%	9.5%	8.2%	-4.6%
学校生活不満足群	12.4%	6.9%	5.7%	-6.7%

き続き、この体制で取り組むことで一層効果が期待できる。」「SSEでの学びは、人間関係の基礎になる。般化していくことが大切だ。」等の意見が聞かれた。全校規模でソーシャル・スキル教育に取り組む有効性を職員自身が実感することができた。

(4) 保護者の関心の高まり

保護者に対して学校からの便りを通じ、ソーシャル・スキル教育の学習の様子を継続的に伝えてきた。学年によっては家庭でも学習したスキルの実行を促すホームワークカード(図6)に取り組み、家庭を巻き込んで実践した。「あたたかいメッセージ」のホームワークカードには、自分が言った温かい言葉や家族から言われた温かい言葉を記入した。保護者には、児童が一週間記入したカードを見て、振り返りの感想を書いてもらうようお願いした。保護者からの感想には、保護者自身が「あたたかいメッセージ」の大切さを実感し、日頃このスキルを意識していないことへの反省が記されていた。学校からの便りを通じ保護者に理解を求めたり、保護者を巻き込んで実践したりしたことは、保護者のソーシャル・スキル教育への関心を高めることになった。保護者の関心が高まることで、家庭の中でも児童のソーシャル・スキルが実行されやすい環境が整い、日常生活の中へ一層浸透していくといえる。

月日	自分で書いたメッセージ	親の人が書いたメッセージ
7/10(水)	数分間の時、いろいろなものは、では自分といふよういわれて、振り返らうといふこと。	エピソードをいくつか、「上手に振り返ることができた」「上手!!」と褒めてくれた。
7/11(木)	もうすぐお誕生日だと思っ、お母さんお父さんと話したいよと書いてくれた。振り返らうと書いた。	お誕生日のプログラムをいくつか、「お母さんお父さんおめでとう!!」と書いてくれた。
7/12(金)	今日、べんちんを世話する手伝いをしたから、「ありがとう」と書いた。	スグにおいで見せたよ、上手にやってくれたねと褒めてくれた。
7/13(土)	お母さんお父さんお誕生日おめでとうと書いてくれた。振り返らうと書いた。	エピソードをいくつか、「お母さんお父さんおめでとう!!」と書いてくれた。
7/14(日)	お母さんお父さんお誕生日おめでとうと書いてくれた。振り返らうと書いた。	お母さんお父さんお誕生日おめでとう!!と書いてくれた。
自分のよみかき	あたたかいメッセージは、自分から書いたメッセージ、お母さんお父さんお誕生日おめでとうと書いてくれた。振り返らうと書いた。	お母さんお父さんお誕生日おめでとう!!と書いてくれた。

〔図6 家庭でのホームワークカード〕

〈ホームワークカードに寄せられた保護者の感想〉

- ・つつい「あっそう」と言ってしまうので、気を付けなければと反省しています。子どもの方から「あたたかいメッセージ」をたくさんもらいました。
- ・何気ない言葉でも嫌な気持ちになったり、良い気持ちになったりします。あたたかいメッセージを日頃から意識して生活に取り入れたいです。

5 考 察

全校規模のソーシャル・スキル教育の利点は、学校全体の雰囲気が変わり、良いモデルとなる集団や個人が多くなることである。特定の学年・学級だけが変わっても、学校全体の変化には限界がある。校内に良いモデルを増やし、不適切なモデルを減らしていくことが、生徒指導上の問題を未然に防ぐ上で特に重要である。大規模校で全校規模のソーシャル・スキル教育を実施する際のポイントは、大きく二つある。1つは、職員間で共通理解を図り、全職員で実践していくことである。そのために、推進の中心となる組織を立ち上げ、推進役が強いリーダーシップを発揮していくことが必要である。さらに、生徒指導部など他の組織とも適切に連携を図りながら多くの職員を巻き込んでいくことが大切である。職員の中には、実践当初、ソーシャル・スキル教育に抵抗感を抱いていた者もいる。しかし、学校全体が計画的に着実な実践を積み重ねる中で、目の前の児童が変わっていった。このような児童の姿から、職員は確かな手応えを掴み、全校規模で取り組むソーシャル・スキル教育に理解を示し、期待を抱くようになってきた。二つ目のポイントは、無理なく学校全体で取り組める計画を立てることである。例えば、取り上げるスキルをあえて3つにしぼった。これは、多くのスキルを取り上げ次々に実施していくよりも、1つのスキルに対し手順を追いながら丁寧に取り組んでいくことが大規模校では効果的であるからである。

年度末の学校評議員会の席上、地域の方々から「ソーシャル・スキル教育の導入により、学年・学級を超えて雰囲気がよくなっている。」「ソーシャル・スキル教育は児童が生活する上で一番大切なことを扱っている。結果が即現れないこともあるが、長い目で見れば非常にすばらしい活動である。継続を期待する。」との意見が寄せられた。全校規模のソーシャル・スキル教育は地域からも注目されるようになってきている。今後の課題は、この取組を「継続していくこと」である。大規模校では、年度末に多くの職員が転勤する。職員が激しく入れ替わっていても、推進体制を維持し、職員が一丸となってソーシャル・スキル教育に取り組んでいく体制作りが必要である。そのためには、校務分掌への位置付けが鍵となる。

〈引用参考文献〉

伊佐貢一「全校児童を対象とした社会的スキル訓練が学級生活満足度に及ぼす影響」上越教育大学実践論文集第12集, 2002年, 149~154pp
 伊佐貢一「小学校におけるソーシャル・スキル教育プログラムの開発」上越教育大学実践論文集第13集, 2003年, 101~106pp
 伊佐貢一「人間関係を結ぶ力の育成~学校の教育活動全体の中で行うソーシャル・スキル教育の実践を通して~」, 日動火災研究助成論文 未公刊, 2004年
 伊佐貢一「温かいメッセージのソーシャル・スキル教育~授業や個別支援で使える学習シナリオ33~」, 明治図書, 2008年
 新発田市立竹俣小学校「竹俣のソーシャル・スキル教育 平成19年度研究紀要」, 2007年
 相川充他「実践! ソーシャルスキル教育: 小学校編」, 図書文化社, 2005年